

## 【論考】

### 初期ドゥルーズにおける精神分析への対応

財津 理

ドゥルーズの死後、ラブジャードによって編集されたドゥルーズのテキスト集『無人島』(2002)の「はじめに」の「注1」で、1989年ごろにドゥルーズによって作成された著作目録の計画の簡単な内容が紹介された。その後、その計画の詳細はやはりラブジャード編集の『ドゥルーズ 書簡とその他のテキスト』(2015)の「書誌の計画」のなかで明らかにされた。ドゥルーズは、この計画のなかで、自分の著作をテーマごとに分類している。他方、エリアス・サンバル宛ての書簡(1985年7月)のなかで、ドゥルーズは、また別の分類をしている。どちらも、厳密に出版年に従った分類ではない。<sup>(1)</sup>

85年の分類は、これは分類というより著作一覧であるが、10冊の本を、ひとつずつ番号を付けて並べている。これについて、ドゥルーズは「ある種の一貫性を模索した」と書いてはいる。89年の分類は、85年の一覧とは異なり、11のテーマごとに著作を集めている。興味深いのは、以下のような並べ方の違いである。85年では、3番目に『アンチ・オイディプス』(1972)、4番目に『千のプラトー』(1980)が来て、9番目に『意味の論理学』(1969)、最後に『差異と反復』(1968)が来るという並べ方に対し、89年では、8番目に『意味の論理学』、9番目に『アンチ・オイディプス』、10番目に『差異と反復』、最後に『千のプラトー』が来るという並べ方の違いである。このような順序にどのような意味があるのかについては、ドゥルーズは何も語っていない、少なくとも、85年と89年で自分の諸著作に対するドゥルーズの姿勢が変化したということは推測できる。ドゥルーズ自身による証言がないので確かなことは言うことができない以上、今は、この二種類の分類の仕方は無視したい。

そこで、「哲学について」と題された対談のテキストを、やや詳しく見ていくことにしよう。ドゥルーズの数々の対談のなかでもとりわけこの対談は、本論のテーマの展開に資するところが多いからである。さて、ドゥルーズは『巽：ライブニッツとバロック』を1988年6月に刊行し、その年の9月、文芸誌「マガジン・リテレル(257号)」にこの「哲学について」と題された対談を掲載した。これは、『記号と事件』(1990年)に収録されている。この対談の冒頭で、質問者はドゥルーズに、彼の本格的な作品と

して処女作にあたる『経験論と主体性』(1953年)から『巽』までの著作活動の道程(itinéraire)を、しかもこの道程を以下のような3つの段階(étape)に区別して、たどり直すよう求めている。

その第1段階は哲学史の研究の時期であり、『ニーチェと哲学』(1962)で頂点に達した。その後、第2段階では、『差異と反復』(1968)が書かれ、さらにガタリとの共同作業において『アンチ・オイディプス』(1972)と『千のプラトー』(1980)が書かれて、まったくアカデミックではない文体で独自の哲学がつけられた。そして第三段階では、『ベーコン論』(1981)および『シネマ1』(1983)、『シネマ2』(1985)を書いた後、哲学へのより古典的な取り組みに回帰している。<sup>(2)</sup>

ドゥルーズは、質問者によるこのような道程の区分を一応は承認し、質問者の段階(étape)という語を、時期(période)と言い換えて、彼自身の哲学史的研究を説明し始める。だが『ニーチェと哲学』でドゥルーズの哲学史的研究が頂点に達したという質問者の考えは無視している。その代わり、いきなり彼の哲学史研究全体の目標が提示される。それはスピノザ=ニーチェの大いなる同一性(la grande identité)である。<sup>(3)</sup>しかし今は、ドゥルーズの回答のうち本論にとって必要なところのみを問題にしよう。その必要なところとは、『差異と反復』までのドゥルーズの思索の歩みと、ドゥルーズ自身による『差異と反復』に対する評価である。スピノザ=ニーチェの大いなる同一性に関しては稿を改めて論じたい。

ところで、ドゥルーズの哲学史(l'histoire de la philosophie)すなわち哲学の歴史とは何か。それは、哲学のいわゆる通史ではない。それは、ドゥルーズ自身にとって何か共通点のある哲学者たち一人ひとりの精神と概念の肖像を描く技術=芸術(art)である。<sup>(4)</sup>そして、このような哲学史の仕事は、過去の哲学者が述べたことを繰り返すという作業ではなく、哲学者が暗に言っていた何かを言うという仕事でもある。その何かとは、哲学者が直接には述べていなかったことがらではあるが、それでも哲学者が実際に述べたことがらのなかに現前している何かである。

ドゥルーズは、質問者による区分通りに、ガタリとの共同作業

『アンチ・オイディプス』と『千のプラトール』)の段階を自分の著作活動の第2の時期とみなす。ただしドゥルーズは、この共同作業は協力することではなく、いわば二つの小川(ドゥルーズ並びにガタリ)が合流して「或るひとつの」三番目の川(ドゥルーズ・ガタリ)がつけられることであると言う。そして、この合流において出来上がった二つの作品『アンチ・オイディプス』と『千のプラトール』において、ドゥルーズとガタリは不定冠詞付きの哲学、つまり「或るひとつの哲学(une philosophie)」を試みたというわけだが、ドゥルーズは、その二つの著作のうち『千のプラトール』のほうを、概念を創造する哲学として強調する。

この対談の最後でドゥルーズは、「哲学とは何か」について一冊の本を書くことを予告している。そしてそれから3年後、それはドゥルーズの自死の5年前であるが、『哲学とは何か』(1990)が刊行される。そこから少し長い引用しよう。

「……ただ、哲学とは何かと問うべきときが、わたしたちに到来しただけのことである。だが、わたしたちは、以前そのように問い続けていたし、変わらぬ答えをすでに得てもいた。それは、哲学とは諸概念を形成したり、創案したり、制作したりする技術である、という答えである。ただし、答えが問いを引き継ぐということだけでなく、さらに、答えが、問いの時刻、問いの機会、問いの事情、問いの風景と人物、問いの条件と未知の要素を決定するということまでも必要であった。」<sup>(5)</sup>

ところで、『哲学とは何か』を読んで、概念創造の必要性やその目的は何かという疑問をもつ読者は多いかもしれない。端的に言って、哲学における概念創造は、結局は通史としての哲学史の内部の問題ではないかという疑問が湧くのではないだろうか。質問者も、対談のなかでドゥルーズの「哲学の本領はつねに概念を創案するところにある」<sup>(6)</sup>という断言を聞いているので、以下のような疑問をドゥルーズにぶつけている。「それにしても、新たな概念を創造する必要はどこに由来するのでしょうか。……今日、哲学の責務、哲学の必要性、そして哲学の「プログラム」さえもがあるとなれば、あなたは、それをどのように定義されますか。」<sup>(7)</sup>

ドゥルーズは、この問いに対して質問者を満足させるような答えを出しているようには見えない。けれども、その代わりと言っては語弊があるかもしれないが、『差異と反復』と「思考のイメージ」と「概念創造」との関連を説明しており、この説明は重要である。思考のイメージとは、何かいっそう深いものであり常に前提となるものである。それは、或る種の座標系、潜勢的力動

(dynamisme)の系、方向設定(orientation)の系であり、要するに、「思考すること」とおよび「思考のなかで方向設定すること」を意味するものであって、いずれにせよ「ひとは内在平面のうに存在する」。<sup>(8)</sup> 内在平面(plan d'immanence)とは、『哲学とは何か』における定義によれば、思考のイメージのことであり、「思考と自然」あるいは「ヌース(精神)とピュシス(自然)」という二つの面をもつものである。<sup>(9)</sup>

さて、思考のイメージは、思考の秘密のイメージでもあって、これが展開したり、分岐したり、変異したりすることによって、新たな概念創造の必要性を引き起こす。<sup>(10)</sup> 要するに、思考のイメージこそが概念創造を導くものである。そして思考のイメージに関する研究は「ヌース論(noologie)」であり、これが『差異と反復』の本当の目的であるとドゥルーズは言う。<sup>(11)</sup> ドゥルーズはこの対談で、『差異と反復』の第3章である「思考のイメージ」の章を『差異と反復』の根幹とみなしている。それは、「『差異と反復』アメリカ版(1994)への序文」(この序文はすでに1986年にドゥルーズによって書かれていた)<sup>(12)</sup>の末尾で言われていたことでもある。ところが、『差異と反復』の第3章では「イメージなき思考」の重要性が説かれている。よく指摘されることだが「思考のイメージ」の機能が変更された、と見てよいのだろうか。これについては以下で少しばかり考察することにしよう。

ところで、この対談の質問者は『差異と反復』をあまり重要視していないようだ。それは、『差異と反復』(および『意味の論理学』)を支えている精神分析が、『アンチ・オイディプス』では打ち倒すべき敵になっているということを質問者が重要視しているからであり、また、『アンチ・オイディプス』が、六八年五月(革命)の情勢に関する最初の偉大な哲学書、その最初の真の哲学的宣言であったとみなしているからである。<sup>(13)</sup> それに対して、『差異と反復』は、その出版は六八年だが六八年五月(革命)以前に書かれていたこともあり、具体的な社会革命の宣言書ではないからであらう。

さらに質問者は、概念創造の必要性の由来に関するドゥルーズの返答に満足がいかなかったのか、哲学者の政治的行動について以下のような質問をドゥルーズに投げかけている。「あなたは、フーコーと共に、GIP(監獄情報グループ)に所属しました。コリュージュ(毒舌で知られる有名なコメディアン、俳優)の大統領立候補に賛成する署名をしました。パレスチナを支持する立場を表明しました。ところが、「68年以後の時代」からはむしろ、あなたは、ガタリよりもはるかに「寡黙」であったように思われます。人権運動とは無縁のままであったし、法治国家の哲学とも無縁でした。それは、わざとそう決めたからなのでしょうか、故意の沈黙によることなのでしょうか、それとも失望があったから

なのでしょうか。社会における哲学者の役割というものがあるのではないのでしょうか。」<sup>(14)</sup> この質問に対するドゥルーズの答えの末尾は、こう締めくくられている。「わたしたちが望むことができ、現代社会に完全に適した唯一のコミュニケーションは、アドルノのモデルすなわち投擲通信（海難者が手紙を入れたビンを海に投げ込む）か、ニーチェのモデルすなわち一人の思想家が矢を放ち別の思想家がその矢を拾うかのいずれかである。」<sup>(15)</sup>

もう少し積極的な姿勢をドゥルーズに示してほしかったと思う読者もいるだろうが、しかしこの対談の一九年前、『差異と反復』出版直後、そして『意味の論理学』出版直前に行われた、「ジル・ドゥルーズ哲学について語る」と銘打たれた対談の末尾では、「革命なるものの現在の問題、官僚制を伴わない或るひとつの革命の問題は、新たな社会的人間関係の問題であろう。新たな社会的人間関係とは、そこにおいて特異なものたち、つまり能動的な少数派が、所有地も囲い地もないノマド空間のなかに登場するような社会的人間関係である」<sup>(16)</sup> と言われている。『差異と反復』を書きあげたとき、ドゥルーズはすでに、精神分析への対応は別として、『アンチ・オイディプス』の基本的なスタンスをもっていたと言えるだろう。（『差異と反復』における「ノマド」については別の機会に論じよう。）

私は、今は、上記の 1988 年の対談「哲学について」におけるドゥルーズの結論（アドルノのモデルかニーチェのモデルか）については何も言わないでおこう。そして、ドゥルーズの著作活動の第 3 段階つまり 3 番目の時期についても触れないでおこう。

∴

本論が問題にするのは、『差異と反復』までのドゥルーズにおける精神分析への対応である。まず、『差異と反復』のアメリカ版の序文で示された『差異と反復』の独特な位置を見ておこう。ドゥルーズはこう語っている。

「……私を襲い熱狂させたヒューム、スピノザ、ニーチェ、ブルーストを研究したあと、私は「哲学すること」を試みたのだが、その最初の著作こそ、『差異と反復』であった。その後の私の仕事はすべて、この書物に繋がっていた。ガタリとの共著でさえそうである（もちろん私は今自分の観点から語っている）。では、どうしてひとりの人物にしかじかの問題が結びつくのだろうか。たとえば、なぜ、私に取りついたのは差異と反復であって、それ以外のものではないのだろうか。しかも、差異と反復は、別々にではなく、結合したかたちで私に取りついたのである。もとよりこれに答え

るのはたいへん難しいのだが、ともあれ、差異と反復は、必ずしも新しい問題ではない。なぜなら、哲学史は、そしてとりわけ現代哲学は、つねにこの問題に取り組んでいたからである。……」<sup>(17)</sup>

ドゥルーズは、これを、『差異と反復』出版から 18 年後、自死する 9 年前の 1986 年、六一歳のときに書いた。彼は、このときすでに、『差異と反復』以後の大作のほとんどを刊行している。この序文は、ドゥルーズが晩年におのれの仕事を回顧して書いたものであろう。これによれば、『差異と反復』は「哲学すること」を試みた最初の著作であり、その後の彼の著作はすべて『差異と反復』に繋がっている。では、どのように繋がっているのだろうか。この「アメリカ版への序文」の末尾で、ドゥルーズはこう答えている。「……わたしたちが、樹木のモデルとは対照的なリゾームという植物的モデルを思考のために援用するときには、『差異と反復』の第 3 章こそが、それ以降のもろもろの書物にまで、しかもガタリとの共同研究にまでも、樹木的思考ではなく、〈リゾーム思考〉を導入しているように思われる。」<sup>(18)</sup> こう語ったとき、ドゥルーズは『差異と反復』を『千のプラトー』の観点から捉え直しているように見える。しかしここではまだ、「概念創造を導く思考のイメージ」は登場せず、超克すべき「思考の古典的イメージ」の代わりに、「思考の或る新たなイメージ」あるいは「思考を投獄するイメージに対する思考の解放」<sup>(19)</sup> が主張されているだけである。この序文を書いた 1986 年においては、思考の解放の観点から「思考のイメージ」が問題にされているだけだが、その二年後に行われた対談「哲学について」では、『哲学とは何か』の構想が熟しつつあり、『差異と反復』第 3 章が、「概念創造を導く思考のイメージ」の観点から捉え直されたと言ってよいだろう。しかも『千のプラトー』も『哲学とは何か』における概念創造の視点から捉え直されている。

「ヒューム、スピノザ、ニーチェ、ブルーストを研究したあと、私は哲学することを試みた」とドゥルーズは言うが、では「哲学を試みる」以前の、つまり『差異と反復』以前の諸著作と、『差異と反復』とはどのような関係にあるのだろうか。言い換えるなら、以前の哲学的研究は、『差異と反復』における「哲学すること」に生かされたのだろうか。たしかに、『差異と反復』はそれ以前の著作から多くの材料を集めている。これを詳細に列挙することは今はできないが、少しだけ例を挙げるならば、『差異と反復』第二章の冒頭は『経験論と主体性』を、第二章の純粋過去論は『ベルクソニズム』を踏まえた議論であるし、またカント、プラトン、ライプニッツと並んで同じように数多く何度も言及されるニーチェは『ニーチェと哲学』（1962）を踏まえて論じられている。

たとえば、「ドラマ化 (dramatisation)」はすでに『ニーチェと哲学』で論じられていた概念である。なるほど『差異と反復』を創造的に読むためには、それ以前のドゥルーズの著書を読んでおく必要はないだろうが、しかし以下で見ると、『差異と反復』に至るドゥルーズの問題意識、それも『アンチ・オイディプス』における反精神分析の声高な主張によって隠れてしまった『アンチ・オイディプス』以前の問題意識、これを明るみに出すことは無意味ではない。本論は、反精神分析の声高な主張によって隠れてしまったドゥルーズの問題意識、換言すれば精神分析の哲学的解釈に焦点を合わせるのだから、『差異と反復』以前のいくつかの著作におけるフロイト及びラカンへの言及を問題にしなければならない。ただし、前期ドゥルーズの諸著作における精神分析論だけでも、まとめれば全体としては膨大な量になる。また、『差異と反復』におけるフロイトへの言及は、その「序論」、「第二章」、「第五章」、「結論」で離散的になされており、ラカンへの言及は、フロイトよりもはるかに少なく、「第二章」に集中している。そして「第二章」の後半部では、時間論に即して精神分析理論が検討されているのだが、拙訳はラプラシユとポンタリスの『精神分析用語辞典』（みすず書房）の訳語に合わせてドゥルーズの精神分析に関する叙述を、正直なところ何とか日本語に転換したのであって、私が現在進めている『差異と反復』の改訳においてもっと精密な訳文をつくることができたときに『差異と反復』における精神分析論に関して立ち入ったことが言えるだろう。これからドゥルーズの諸著作を見ていくのだが、したがって以下、やや表層的かつ形式的な考察にならざるを得ない。

だがその前に、ドゥルーズにおけるいわゆる八年の空白を考えなおさなければならない。上記の対談「哲学について」のなかで、ドゥルーズはこう語っている。

「書誌的にして伝記的な基準で振り返ってみたらどうかということなら、私は自分の最初の本をかなり若い時に書き、それ以後八年間はもう何も書かなかったということがわかります。……それは、言わば私の人生における空白部 (trou)、八年の空白部のようなものです。それこそが、人々の人生において私に興味深く思われるもの、つまり人々の人生に含まれる空白部、ドラマティックなこともあれば、そうでないこともある欠落なのです。……おそらくこのような空白部においてこそ、運動がなされるのです。というのも、壁にぶつかって行き詰まらないためには、どのようにして運動をするべきか、どのようにして壁を突き抜けるべきか、これがまさに問題になるからです。それはおそらく、動きすぎないことによって、しゃべりすぎないことによっ

てなされることなのでしょう。それは偽の運動を避けるということ、記憶がもはや存在しないところにとどまるということです。……」<sup>(20)</sup> (この「記憶がもはや存在しないところにとどまる」とは、以下で言及する『ニーチェと哲学』における「忘却の能力」のこだまだろう。)

ドゥルーズの最初の本とは、もちろん『経験論と主体性』(1953年)であり、八年後の本は『ニーチェと哲学』(1962年)だろう。ドゥルーズは、『経験論と主体性』以後八年間は何も書かなかったと言うが、実際は、その間にベルクソンに関する二つの論文「ベルクソン 1859-1941」(1956)と「ベルクソンにおける差異の概念」(1956)を発表し、一つのベルクソン選文集『記憶と生』(1957)を刊行している。だが今は、これは無視してよいだろう。この八年の空白は、「壁を突き抜ける」ドゥルーズの苦闘の期間と見ることができる。こう推測させるのは、八年後に公開されたドゥルーズの著作群である。以下に列挙しよう。

『ニーチェと哲学』(1962)：フロイトに言及。

『カントの批判哲学』(1963)。

『ブルーストとシーニュ』(1964)：フロイトに言及。

『ベルクソニズム』(1966)。フロイトに言及

『ザッヘル=マゾッホ紹介』(1967)：フロイトとラカンに言及。

『差異と反復』(1968)：フロイトとラカンに言及。

『意味の論理学』(1969)：フロイトとラカンに言及。

『アンチ・オイディプス』(1972)：反精神分析宣言

ドゥルーズは空白の八年の後、ほとんど毎年のように本を出している。しかもほとんどの本が、多かれ少なかれフロイトに言及している。したがって、この八年の間ドゥルーズは、ベルクソンを研究する以外は悩むばかりで、八年経過してからあわてて精神分析に取り組んだとは考えにくい。あくまで推測にすぎないが、ニーチェやカントだけでなく、フロイト並びにラカンも読み込んでいたのではないだろうか。では、哲学史家として出発したドゥルーズは、自分の最初の本『経験論と主体性』を書きあげてから、フロイトに接近したのだろうか。だが、『経験論と主体性』には、早くもフロイトに、ただし簡略に言及している箇所がある。「連合諸原理によって説明のつくものは、せいぜい思考一般の形式であって、特異な思考内容ではない。……この点では、ベルクソンとフロイトほど異なった著者たちでさえも一致している。……どれほど控えめに言ったとしても、ヒュームこそそれを考えた最初の人である。」<sup>(21)</sup> ヒューム論にベルクソンとフロイトを挿入しているということから、ドゥルーズは、若いころか

らベルクソンのみならずフロイトにも関心をもっていたことがわかる。フロイトへの接近は、後になってから思いつかれたことではない。さてわたしたちは、8年の空白の後に書かれた『ニーチェと哲学』と『ザッヘル=マゾッフ紹介』を見ることにしよう。この二つの著書は、フロイトを正面から扱っているばかりでなく、ともに『差異と反復』への助走と見られる部分をもっていると思われるからである。

ドゥルーズが立ち入ってフロイトを取り上げる最初の作品は『ニーチェと哲学』である。そこで、『ニーチェと哲学』の第四章「ルサンチマン（恨み）の原理」における意識と無意識の、そして能動と反動の複雑な関係を論じるドゥルーズの力業を見ることにしよう。ドゥルーズはここで、フロイトの『夢判断』（『夢解釈』）に基づいて局所論の仮説をニーチェのルサンチマンの思想に見いだそうとするからである。ドゥルーズによれば、フロイトの局所論は、「知覚可能な刺激を受けながらも、それを保存せずしたがって記憶をもたない心的装置の外的システム（意識）」と「そのシステムの背後にあって、その一時的な刺激を持続的痕跡（記憶痕跡）に変える別のシステム（無意識）」を区別する。ドゥルーズは、『夢判断』（『夢解釈』）から「われわれの思い出（souvenirs）は、本来無意識的である」そして「意識は記憶痕跡が中断するところで生まれる」という文章を引用する。<sup>(22)</sup> ニーチェも、『道徳の系譜』において、フロイトにおけるように、反動的装置（心的装置）の二つのシステムつまり意識と無意識を区別しているとされる。ということは、ニーチェにおいても、意識と無意識は反動的（反動的）であるということだ。まず反動的無意識は持続的痕跡つまり記憶痕跡によって定義されるものである。無意識における反動は記憶痕跡に対する反動だと言ってもよい。だが、環境への適応が可能になるためには、無意識とは異なる別のシステムつまり意識が必要になる。意識というシステムは、現前する刺激に対する、あるいは対象の直接的なイメージに対する反動である。ドゥルーズはさらに、ニーチェに、意識を支える或る能動的な力を見る。これは超意識的な「忘却の能力」とされる。心理学の誤りは、忘却を、ネガティブな決定作用とみなして、その能動的でポジティブな性格を見出さなかったところにある。忘却のニーチェ的定義は、「ものごとを再生させ、治療する、可塑的な力」である。こうして、意識においては反動の対象は刺激であるがゆえに、その反動は能動化させられるものに生成し、それと同時に、痕跡に対する反動は感じられないものとして無意識のなかにとどまる、とドゥルーズは言う。この忘却の能力は、能動的であるにもかかわらず、反動的な意識と無意識のもとに派遣されるものである。<sup>(23)</sup>

ところが、この忘却の能力が衰弱するときには、意識は硬化し、

意識における刺激は無意識における記憶痕跡と混同され、逆に、無意識における痕跡に対する反動は意識へと上り、意識に侵入するようになる。こうして、無意識における痕跡への反動は感じられるものに生成し、それと同時に、意識における刺激への反動は能動化させられなくなる。痕跡が反動的装置つまり心的装置のなかで刺激にとって代わるとき、反動そのものが能動に取って代わり、反動は能動に対して優位に立つ。そして反動的装置の内部で、反動的諸力（意識と無意識）は能動化されることを互いに妨げあう。<sup>(24)</sup>

ところで、ルサンチマン（恨み）を生じさせるためには反動だけでは不十分である。ルサンチマンを反動という力だけによって定義してはならない。ルサンチマンは、反動が能動に対して優位に立つというかたちで成立するからである。そして反動は、能動化させられるのをやめることによってようやく能動に対して優位にたつ。ルサンチマンの人間とは、「再-〈行動=能動化〉する（ré-agir）」のではない人間である。<sup>(25)</sup> こうして、ドゥルーズは、ルサンチマンとは、感じられるものになると同時に、能動化されなくなる或るひとつの反動（反作用）であると定義する。したがって、ルサンチマンにたんなる復讐の欲望や反逆と勝利の欲望<sup>(26)</sup>を見るだけでは、以上のようなルサンチマンの位相的構造は理解できないことになる

では、ドゥルーズはフロイトに対して全面的に賛同しているのだろうか。『ニーチェと哲学』の長い原注で、ドゥルーズは一応、ジョーンズによればという前提で、フロイトはニーチェからの影響をはっきり否定したという点を強調する。（もちろん、フロイトの諸著作がニーチェに影響を及ぼしたことはその発行年からして不可能である。）けれども、フロイトが「局所論の仮説」と呼ぶ生の図式とニーチェの図式は一致する。だがそれでもなお、両者の差異はある。あくまで想像できるという話だが、つまりやや苦しいドゥルーズの議論ではあるが、ニーチェはフロイト風に考えたことがあるかもしれないにしても、それでもニーチェは、フロイトにおける心的な生についてのあまりにも「反動的な」考え方を、真の「能動性」に対する無視を、そして真の「価値変更（昇華）」を構想できないということを非難したであろう、とドゥルーズは述べる。<sup>(27)</sup> ここからわかるのは、ドゥルーズは、フロイトを手放しで賛美しているのではないということだ。

わたしたちはつぎに、『ザッヘル=マゾッフ紹介』（1967）を見ることにしよう。周知のようにドゥルーズは、この書で、フロイトのサド=マゾヒズム、あるいは自我に向かって反転したサディズムとしてのマゾヒズムという概念を批判し、マゾヒズムをサディズムから切り離してマゾヒズムの独自性を論じている。ところで『ニーチェと哲学』の5年後、ようやくこの書で、ラカンが

登場する。そして、ラカンに依拠しながらフロイトの「否認 (Verleugnung dénegation)」の重要性を指摘する。ドゥルーズは、フロイトの「否定 (Verneigung)」、「排除 (Verwerfung)」、「否認 (Verleugnung)」という概念の重要性を、ラカンが明らかにしてくれたと言う。そしてラカンの否認の概念にもとづいて、ドゥルーズは次のように語る。「おそらく、否認を、以下のような操作の出発点として理解しなければならない。すなわち、否定することでもなく破壊することさえもなく、むしろまさに、存在するものの正当性に対して異議を唱えるという操作、所与のあなたに所与ではない或る新たな地平をわたしたちに開くという作業に固有な一種の宙吊り (未決定状態) や中性化によって存在するものを変様するという操作である。」<sup>(28)</sup>「マゾヒズムは、否認から宙吊りへ赴く。超自我の圧迫からおのれを解放するプロセスとしての否認から、理想を受肉するものとしての宙吊りへ赴くのである。・・・否認は、超自我を忌避し、そして、超自我から独立した、純粹で、自律的な「理想自我 (理想的自我)」を生まれさせる能力を母なるものにゆだねるのだ。」<sup>(29)</sup>

フェティシズムも本質的にマゾヒズムに属している、とドゥルーズは語る。フロイトの『呪物崇拜 (フェティシズム)』から、ひとつの文章が取り出される「フェティッシュとは、女性のファルス (phallus) のイメージあるいはその代用物である。」<sup>(30)</sup> ドゥルーズによれば、フェティッシュとは、女性にはペニスが欠如していることを否認するひとつの手段である。フェティッシュによって、ペニスの権利上のつまり論理上の維持が可能になる。否認において、現実に関する認識は、宙吊りにされ中性化されるからである。

ラカンがその重要性を明らかにしたと言われる「否認 (Verleugnung)」の概念はこのように肯定的に論じられ、ラカンは称揚されるのだが、マゾヒズムにおいてまた、ラカンは批判される。ドゥルーズによれば、マゾヒズムはバウハーフエンに影響されて三つの女性的典型をつくりあげた。<sup>(31)</sup> そして、この三つのタイプの女性 (母) はひとつの象徴的次元 (象徴界) を構成しており、その次元のなかでは、父ははすでに削除されている。ところが「精神分析が、そのもっとも進んだ探求 (ラカン) において、象徴的次元 (象徴界) の創設を「父の名 (nom du père)」に結びつけているのを見れば、驚くのは当然である。母は自然に属し、父が文化の唯一の原理であり法 (loi) の代表であるというのは、奇妙にもあまり分析的でない考えを維持することではないか。マゾヒストは、象徴的次元を、母相互的なものとして生き、この次元で母が法と一体化するような条件を定立するのである。」<sup>(32)</sup>

ラカンがその重要性を明らかにした「否認」によってマゾヒズ

ムは、ドゥルーズから見れば、そのラカンは、ドゥルーズにとってはマゾヒズムにおいて相互女性的であるはずの象徴的次元を、法の根拠になる「父の名」に結びつけていることになる。

ところで少し回り道をするが、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』は、周知のようにマルクスがルイス・モーガンの『古代社会』から書き抜いた様々な抜粋に基づいて出来上がった書である。そしてその『古代社会』の副題が示す文明の進化の三つの段階 (from Savagery through Barbarism to Civilisation) が、『アンチ・オイディプス』第 3 章の題目として借用されている《SAUVAGES, BARBARES, CIVILISES》。さて、そのバウハーフエンが、「母権制」に関してモーガンに影響を与え、そのモーガンがマルクス、エンゲルスに影響を与えたことは、よく知られている。私が言いたいのは、『ザッヘル=マゾヒズム紹介』においてドゥルーズがマゾヒズムに関してバウハーフエンを取りあげてラカン批判をしたとき、すでにエンゲルスまで念頭にあった可能性があるということである。後に『アンチ・オイディプス』は「エンゲルスは・・・バウハーフエンの天才を讃えている」と書き、『家族・私有財産・国家の起源』から引用を行っている。<sup>(33)</sup> したがって、『差異と反復』に先立つ『ザッヘル=マゾヒズム紹介』において、『アンチ・オイディプス』につながる潜在的な線がすでに延び始めていたのではないだろうか。ガタリとの出会いによって、その潜在性が一見過激な形で現働化したとも言うことができるだろう。だが、これは状況証拠による私の推測でしかない。このような潜在性が現働化するプロセスを諸著作のテキストにそくして明らかにするのは、今後の私の課題でもある。

最後に、「発狂した概念創造の企て」である哲学史『差異と反復』における精神分析関係の議論を少しばかり見ておこう。少しばかりというのは、すでに述べたように、『差異と反復』を改訳中であり、特に精神分析関係の論述で使われているドゥルーズの用語、表現をどう訳すべきか、つまりどう解釈すべきかで多少の迷いがあり、また、『差異と反復』で重要視され引用も行われているラカンの論文「〈盗まれた手紙〉についてのセミナー」も翻訳中であり、そのとんでもない文体に悩まされている最中であるからだ。さて、精神分析の諸概念の検討は『差異と反復』のなかで離散的に行われている。繰り返す言うが、もっとも詳細なその検討は第二章の後半で遂行されている。第二章の前半で三つの「時間の総合」が展開され、その後半で三つの「時間の総合」それぞれに即して精神分析的諸概念の時間性が問題にされている。では「時間の総合」あるいは時間の「受動的総合」とは何か。これを第二章の前半の時間論において十分に解明しないことには、第二章の後半におけるフロイトの諸概念の時間的意味を説明することはで

きない。だが、ここで第二章の前半の時間論を詳述する余裕はない。したがって、今は外的な説明から始めよう。

『受動的総合』は、名称としては、フッサールの『デカルト的省察』第38節「能動的発生と受動的発生」、あるいはメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』第3部「Ⅱ 時間性、4 現前野、過去と未来の地平、作動的指向性」の記述から取られたのかもしれない。しかし、「時間の総合」という名称は、ハイデガーの『カントと形而上学の問題』第32節以下の論述から影響を受けていると見て間違いはないだろう。<sup>(34)</sup>

ハイデガーは、カントの『純粋理性批判』第1版におけるいわゆる「三段の総合」、すなわち「1、直観における覚知の総合」、「2、構想力（想像力）による再生の総合」、「3、概念による再認の総合」に現在性、過去性、未来性をあてがっている。これに基づいて、カントの三つの「総合」が「時間の総合」と呼ばれることがあるようになった。けれども、ドゥルーズの「時間の総合」は、ハイデガーによるカントの「三段の総合」の時間解釈を引き継いではいないように見えるが、ドゥルーズを、ハイデガーと、そして上記のフッサール、メルロ＝ポンティと比較して検討することは無意味ではないだろう。

『差異と反復』第2章前半における三つの時間の総合：「時間の第一の総合」は、「生ける現在」を中心にして論じられる時間論であり、「経験的な受動的総合」と呼ばれる。ヒューム、ベルクソン、フッサール、とりわけフッサールの『内的時間意識の現象学』が参照されて、過去と未来は「生ける現在」の二つの次元であるとされる。；「時間の第二の総合」は、「純粋過去」を中心にして論じられる時間論であり、「超越論的な受動的総合」と呼ばれる。純粋過去とは「かつて現在であったことがなく、現在が過去になったのでもない過去」であり、その例として、ブルーストの『失われた時を求めて』のなかに登場するコンプレという町（忘却のなかに出現する即自）や、プラトンのイデアなどが挙げられている。；「時間の第三の総合」は「空虚な形式としての時間」を中心にして、未来がテーマとなる時間論である。ただし、これは「受動的総合」とは呼ばれていない。ニーチェに基づいて、未来は反復とされ、この反復が永遠回帰とみなされる。未来の反復としての永遠回帰は、過去も現在も回帰させず、絶対的な新しさつまり差異を生産する。

『差異と反復』第二章の後半では、『快原理の彼岸』（『快感原則の彼岸』）がテーマとして掲げられ、それが変奏されていく<sup>(35)</sup>。

『快原理の彼岸』は、まず、ひとが快を「原理的に」追求するようになる価値を当の快はそなえていないということを意味しているのだが、そればかりでなく、快が実際に原理へと生成する諸条件を規定するというをも意味している。以下に使われる精

神分析関係の用語の詳しい意味については、ラプランシュとポンタリスの『精神分析用語辞典』を見ていただきたい。また、以下の文章は、ドゥルーズによる断定をたんに要約したものであって、その断定の妥当性は考慮に入れていないことをお断りしておく。

1、「拘束」された興奮の水準にしたがって、受動的で、部分的な、縮約する自我が、つまり局所的な自我たちが形成され、それらが「エス (Es Ça)」を満たす。そして拘束が遂行されるときに、それら局所的自我が「エス」に固有な時間を、すなわち生ける現在を構成する。興奮の拘束は、習慣という純粋な第一の受動的総合を意味しており、これが満足一般の原理の価値を「快」に与えるのである。<sup>(36)</sup> 2、ドゥルーズは、深化した第二の受動的総合において、全体化されえない「部分対象」が観照されるようになるという。この部分対象は潜在的対象でもあり、その例として、メラニー・クラインの「良い対象と悪い対象」、ウィニコットの「移行（あるいは過渡）対象」、ラカンの「対象 a」が挙げられている。「おのれ自身の現在と同時的であり、過ぎ去る現在に先立って存在しており、あらゆる現在を過ぎ去らせる純粋過去がそうした潜在的対象の質を表している。」<sup>(37)</sup> 第一の受動的総合（生ける現在）が、第二の受動的総合（純粋過去）に深化して、これが幻覚性の特殊なナルシシズムの満足を蓄え、そうした満足を潜在的対象の観照における満足とする。このとき、快原理は、二つの新たな条件を、すなわち「自己保存欲動」と「性欲動」を受け取ることになる。3、三つの「時間の総合」は、無意識の構成要因である。それは「快原理」の三つの彼岸でもある。第一の総合（生ける現在）は、時間の土台である。この土台が「快」に経験的原理の価値を与える。第二の総合（純粋過去）は、時間の根拠である。この根拠が、「快原理」を自我の内容に適用する。しかし、第三の総合（形式としての時間）は、「無底」を指し示している。すなわち、タナトス（ドゥルーズでは「死の本能」）が、エロス（生の本能）という根拠と、習慣という土台との彼岸において、「無底」として見出されるということだ。タナトスは、『快原理』と独特の関係を結んでいる。これは、苦に結びついた快というパラドックスにおいて表現されることが多い。<sup>(38)</sup>

以上、急ぎ足で『差異と反復』第二章後半における精神分析概念の時間性を見てきたが、『差異と反復』では、フロイトやラカンに対する批判は顕著ではない。私は、以前は、『差異と反復』第二章前半の時間論の特異性を、フッサールやハイデガーの時間論から考えようとしていたのだが、そしてもちろん『差異と反復』の読み方は各人に任せられているのだが、今は、ドゥルーズの時間論は主にフロイト（『快原理の彼岸』）解釈へのかけはしでもあると考えるようになった。8年の空白の後、ドゥルーズは、『ニーチェと哲学』（1962）から『意味の論理学』（1969）に至るまで、

矢継ぎ早に著書を刊行し、そのほとんどでフロイトを扱っている。ところが、その3年後『アンチ・オイディプス』(1972)における反精神分析宣言である。あの1988年の対談「哲学について」において、ドゥルーズは、『アンチ・オイディプス』が「68年以後の時代」において重要な本になったとすれば、フロイト＝マルクス主義のあらゆる企てと手を切ったからだと答えている。そしてドゥルーズは、『アンチ・オイディプス』が精神分析を批判しようとするのは、この本で、良かれ悪しかれ、詳細に論じられている無意識という考え方に関連してのことです。」と語っている。<sup>(39)</sup>ドゥルーズは、つとめて、『アンチ・オイディプス』は哲学書であると、すなわち、社会的であると同時に欲望的な生産を同一の平面に置いて論じようとする本であると主張し、この本の政治的プロパガンダの面には触れないようにしている。ドゥルーズは、実際のところ、『アンチ・オイディプス』以前のフロイトへの言わば長い自分の執着をどう考えていたのだろうか。それは知るよしもないことだが、私は、とりわけ『ニーチェと哲学』、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』、『差異と反復』、『意味の論理学』におけるフロイト論は、決して過去の無駄な努力ではなく、わたしたちが新たに光を当てるだけの価値をもった貴重な哲学的精神分析論であると信じている。

追補：本論の冒頭で言及した85年におけるドゥルーズ自身による自著の分類は、ドゥルーズのテキスト集を作るための原案であった。ここでは、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』から始まって、10冊の著書が並べられ、9番目に『意味の論理学』が置かれ、『差異と反復』で締めくくられている。これは出版年による分類ではないので、この分類の順序はドゥルーズ思想の時間的发展を表現しているのではないだろうが、『差異と反復』の翌年に出版された『意味の論理学』が『差異と反復』の前に置かれている点に注目してよいだろう。また、89年の分類では、85年のそれよりもはるかに多くの著作が11のテーマにそくして分類されており、本論で言及したように8番目に『意味の論理学』、9番目に『アンチ・オイディプス』、10番目に『差異と反復』、そして『千のプラトー』で締めくくられている。ここでもやはり、『意味の論理学』が『差異と反復』の前に置かれている。私は、この順序に加えて、『意味の論理学』の内容から考えても、『意味の論理学』は、『差異と反復』におけるいくつかの概念や論題の解説あるいは手引きではないかと思っている。『差異と反復』の改訳が完成したら、この点について詳論するつもりである。

## 注

ドゥルーズのテキストからの引用等については、既存の邦訳に従っていない場合がある。

1. 『無人島 1953-1968』河出書房新社、2003年、p7、p11。『ドゥルーズ 書簡とその他のテキスト』河出書房新社、2016年、p10-17、p134-137。
2. 『記号と事件』河出書房新社、2007年、p272。
3. 同書、p273。
4. 同書、p273。
5. 『哲学とは何か』河出書房新社、2012年、p8-9。
6. 『記号と事件』、p273。
7. 同書、p299。
8. 同書、p299。ただしこの箇所の原文の読みと解釈は『哲学とは何か』p68に従った
9. 『哲学とは何か』、p68、p70。
10. 『記号と事件』、p303
11. 同書、p301。
12. 『狂人の二つの体制 1983-1995』河出書房新社、2004年、p162。
13. 『記号と事件』、p290
14. 同書、p308。
15. 同書、p312。
16. 『無人島 1953-1968』、p306。



17. 『狂人の二つの体制 1983-1995』、p157-158
18. 同書、p162。
19. 同書、p161。
20. 『記号と事件』、p277-278。
21. 『経験論と主体性』河出書房新社、2000年、p161-162。
22. 『ニーチェと哲学』河出書房新社、2008年、p224。『フロイト著作集2』人文書院、1983年、p444参照。
23. 『ニーチェと哲学』、p224～227。
24. 同書、p227～228。
25. 同書、p223。
26. 同書、p233。
27. 同書、p415。
28. 『ザッヘル=マゾッホ紹介』河出書房新社、2018年、p45～46。
29. 同書、p191～192。
30. 同書、p46。『フロイト著作集5』人文書院、1995年、p392参照
31. 『ザッヘル=マゾッホ紹介』、p80～81。
32. 同書、p96～97。
33. 『アンチ・オイディプス 上』河出書房新社、2006年、p206。『アンチ・オイディプス 下』河出書房新社、2006年、原注41、p359。
34. 法政大学「法政哲学」第13号（2017）における拙論『『差異と反復』の解析と再構成の試み——1——』参照。
35. 『差異と反復 上』河出書房新社、2007年、p263～313。
36. 同書、p265-266。
37. 同書、p277。
38. 同書、308-309。
39. 『記号と事件』、p292～293。